

Title	特集「メディア研究におけるフレーム分析」に寄せて
Sub Title	
Author	李, 光鎬
Publisher	三田社会学会
Publication year	2007
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.12 (2007.) ,p.1- 3
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集: メディア研究におけるフレーム分析
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20070000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集「メディア研究におけるフレーム分析」に寄せて

2006 年度大会・シンポジウム企画担当 李 光鎬

1990 年代以降、メディア研究、とりわけニュース研究の分野においてフレーム、フレーミング分析というアプローチが大きな注目を集めている。学術論文はもとより、単行本だけを見ても、「Framing Public Life」、「Framing Democracy」、「Framing Terrorism」、「Framing Class」など、題名にフレーミングを冠した研究書は近年数多く出版されている。またメディア研究分野の有力な学術ジャーナルである「Journal of Communication」は今年の 3 月号でフレーミングと議題設定、プライミング効果理論に関する特集を組み、それぞれの理論（またこの 3 つの理論の棲み分けや統合の可能性）に対する学界の関心を反映しているが、その中でもやはり焦点はフレーミング研究に合わされている。フレーム、フレーミング研究（以下単にフレーム研究と記す）は、特に欧米においては、今まさに最も注目されている理論の一つであるといってもよい状況になっているのである。

範囲を限定し、いささか単純化して述べれば、社会における出来事や 이슈がどのような枠組みの下でニュース・テキストとして構築され、それがその出来事や 이슈に対するオーディエンスの認識にどのように影響するのがフレーム研究の中心的な問題関心であるといえよう。このような問題関心はもちろんフレーム研究において初めて提唱されたものではない。これまでもニュース・テキストに内在する傾向的性質（偏向またはバイアス）の解明を目指しては、計量的な内容分析や質的なディスコース分析などが取り組んできたし、ニュースのオーディエンスに対する影響という問題領域では、議題設定効果を代表とするいくつかのアプローチが一定の成果を挙げてきたのである。ただ、フレーム分析は、従来の伝統的な内容分析に比べ、ニュース・テキストの構成や意味、その生産者の意図や意識により注目し、ディスコース分析よりは「間主観性」の高い分析方法を示そうとしてきたように見受けられる。また 이슈の重要性認知以上の影響力を実感しながらも、そのような影響力を捉えられる理論の不在に「歯がゆい」思いをしていた人々にとって、フレーム分析が一つの代案として歓迎された部分もあったのかも知れない。

このような状況の中、国内外で多くの研究者の関心を引き付けているフレーム分析は、理論上また方法論上、既存のアプローチとは異なるどのような新しい視点や分析道具をメディア研究に提供し得るのかを一度整理し、検討してみたいという趣旨で、2006 年の三田社会学会大会のシンポジウムが企画されたのである。もう 1 点、シンポジウムの企画に際して想定された検討課題は、フレーム、フレーミング概念の定義をめぐる「混乱」ともいえる状況、そしてそれに起因する方法論の未標準化の問題である。論者によっては、このような自由度の高い状況が研究を刺激していると肯定的に評価する向きもあるが、いったいフレームとは何であり、それはどのようにして見つけ出すこ

とができるのかについて、定まった規準が示されない状況ゆえに、体系的な研究の蓄積が見込めないのではないかと考えられたのである。これらの問題をめぐって、昨年のシンポジウムでは竹下俊郎、藤田真文、大石裕の3氏にご報告をいただいた後、指定討論者として萩原滋氏、伊藤守氏に加わっていただき、議論を行った。

「三田社会学」の今回の特集は、このシンポジウムにおける報告および議論を踏まえて、報告者の3氏と指定討論者の萩原滋氏にご執筆いただいた論文で構成されたのである。

竹下論文は、メディア議題設定研究の立場から、フレーミング効果研究の手続きを提案し、その手続きに基づいて、バブル崩壊以降における「日本経済の低迷」というイシューを題材に、フレーミング効果を実証的に検証したものである。竹下は、属性型議題設定効果から生み出された「中心的テーマ」という概念を、フレーム概念を操作化する手がかりとして採用することで、議題設定効果の延長線上でフレーミング効果との接点を探るとともに、これまで研究者の直感的能力に頼ることの多かったフレーム抽出方法の代わりにエーデルステインらの「問題状況」図式という外的枠組みを導入することで、手続きの信頼性と分析結果の汎用性を高めた形でフレーミング効果の実証を試みている。

大石論文は、マス・コミュニケーション研究がフレーム概念を取り入れることで、マス・コミュニケーションという社会過程を一つの権力作用として把握できる新しい視座を獲得できたと評価する。大石はまず、フレーム研究が、議題設定研究、ゲートキーピング研究、批判的コミュニケーション研究、言説分析など、送り手・テキスト受け手にいたるマス・コミュニケーション過程の全般における主なアプローチとどのように関連しているのか、またそれらの既存アプローチにどのような刺激を与えたのかを概観している。その上で大石は、政治参加としての社会運動がどのような形でメディア・フレームと関わりあうのかを、日本における社会運動の実例を通じて検討している。メディア研究の文脈では、フレーミング効果の従属変数がオーディエンスの認識だけに限定される傾向があるが、大石はよりマクロな視点で、集合的で組織的な政治参加を後押しし、または抑制する「力」として、メディア・フレームの影響、そしてその影響の裏面に隠されている権力性に注目しているのである。

藤田論文は、カペラとジェイミソンのフレーム概念を取り上げ、その理論的特徴の一つとして「ニュース・フレームは、言語体であり、フレームの効果は、言語の作用によって成立する」という点を指摘する。藤田はこの点に着目し、認知言語学における図地分化、スキーマ、フレーム概念とニュース・フレームの関連を検討し、認知言語学の知見からメディアのフレーミング効果をどのように捉えることができるのかについて述べている。また、出来事の実理解や記憶を助けるニュース・フレームのストーリー性についても物語論の観点から考察を行っている。

萩原論文は、多年間ニュースの実証的な内容分析に携わってきた研究者の立場から、フレームの概念定義をめぐる議論やフレーム研究の体系化に関する議論を詳細に検討するとともに、報道内容からフレームを抽出する具体的な方法に注目しながら、フレーミング効果研究を中心に既存研究のレビューを行っている。また萩原は、争点の報道量ではなく争点における下位属性の強調度合いに

注目する属性型議題設定効果研究とフレーミング効果研究の関連性および相違点についても言及している。

メディア研究におけるフレーム分析は、今回の特集論文だけを見ても、社会学、政治学、認知心理学、認知言語学、物語論、社会運動論など、様々な学問分野にまたがる広い理論的地平を持っている。またメディア・テキストの生産過程から受容過程にいたるメディア・コミュニケーションの全過程が分析の射程に入っている。おそらくこのような開放性と包括性が多くの研究者をひきつけ、活発な議論を生み出す原動力の一つになっていると同時にフレーム研究の「パラダイム」としての安定を妨げる理由にもなっているのであろう。今回の特集がフレーム研究に関心を持っている読者の皆さんに多くの刺激を与える論考になることを期待する。

最後に、議論のポイントや範囲にあいまいさを抱えたままの企画であったにもかかわらず、快くシンポジウムに参加して下さった報告者および指定討論者の方々に、この紙面を借りてあらためて感謝の意を表したい。

(い ごあんほ 慶應義塾大学文学部)